伊都までの水行陸行と耶馬台国*

The third century trip from Taihougun to Ito-koku and "Yamataikoku"

小 合 彬 生 **
by Akio Ogo

The capital of Himiko the lady ruler of Yamataikoku has not been found in spite of centuries lasting studies. The academic arguments seems to be calmed down in these decades confronted by too many parties with too many uncorroborated proposals. It is a chance for the civil engineering skill to explore a possible physical solution to this historical search on the third century Wajin-Koku.

This study, following the original Gishi-Wajinden as closely as possible, concludes that Yamataikoku consists of 27 allied countries, the capital is Ito-Koku where the male king dominates.

And the lady ruler Himiko is in Fumi-Koku. Chinese mission from Taihougun arrives at Ito-Koku, as written exactly in the original text as their final destination, from where the Himiko's palace is "a-day-trip" distant.

1．まえがき

永年の論争にもかかわらず、まだ耶馬台国が見つからないようである。しかし３世紀卑弥呼女王の国は、たしかに倭人の手で成立し、中国の歴史書・三国志にその記録を止めている。[1)]

いわゆる魏志倭人伝の部分は、筆者の20数年にわたる研究によると非常に正確なことが明らかになってきた。[2) 3) 4) 5) 6)]

その記述を「基本に帰って、もういちど見直すこと」で、当時の倭人国の姿を明らかにしたいと思う。

地理、交通、都市、国土面積など、土木工学からの裏付けが、版図の推察に役立ってくる。まず、三国志東夷伝倭人の項（以下、魏志倭人伝あるいは倭人伝と云う）約２千字に忠実に解明を進める。

2．基本となる新しい見方

女王卑弥呼の国は、その研究が数百年も続けられているが、原典に矛盾しない版図は、いまだ提案されているとは云えない（注、1）。

現在、議論は九州説・大和説が対立したまま停滞している感がある。先行する議論では、なぜか「軽視されていた」、つぎの２点に、この問題解決の鍵があると、筆者は気づいた（注、2）。

第１点．「帯方郡からの使節は、伊都国に到り常駐する」こと

これを、筆者は伊都が旅の目的地であったと解釈する。まず、用字の上から、対馬国以南のクニの中で、伊都にだけ「到」が用いられ、他の国ぐにと到着方式が異なることが示されている。その上、郡使が往来した時には、常にここに駐留している。このことから、伊都が旅の目的地だったのではないかと、推察するのである。

第２点．「女王国以北の国には『戸数と道里』を記した」こと

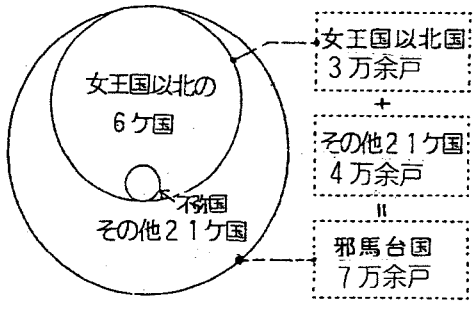
筆者は里数でなく日数で書いてある記述は、物理学の常識を用いれば、「次元の異なる数値」であると見ている。女王国以北の国は、その結果、里数の記されている「対馬、一大、末盧、伊都、奴、不弥」の６ケ国となり、これらの最南端、「不弥のクニ」が「女王国」であると、論理的に決まると考える。

なお、魏志倭人伝の本文（文献1，39-54 頁）は長いため、これら記述を表の形に取りまとめ、**表－1～3**に示す。用字に細かい配慮がされていることに注意してほしい。また、当論の中で、国と「クニ」が使い分けられているが、クニの方は、邪馬台国を構成する小さい国ぐにを「とくに明示したいとき」に用いることにした。

3．導き出される耶馬台国の姿

いま紹介した２つの「新しい視点」に従えば、邪馬台国の姿が明確に浮かび上がってくる。ここまでの論理に、矛盾はない。

まず第１に、女王国は不弥国、千余家の小さい都と結論される。



図－１　集合論で耶馬台国をみる　（作成：小合彬生）

そして、女王国と耶馬台国は、異なる概念として記載されていることが明らかとなる。これが永年の疑問を解決する糸口となる。

---

*　keyword:　邪馬台国、魏志倭人伝、卑弥呼
**　正会員　鉄建建設株式会社　顧問
（〒530-0018　大阪市北区小松原町2-4 富国生命ビル）

続いて第2には、女王国以北の国は、**表－2**により3万余戸の規模であると分かる。耶馬台国は7万余戸である。それゆえ、その他21ケ国は、4万余戸と計算できる。集合の姿を、**図－1**に示す。

さらに、その他21ケ国は、繰り返し21回も「次に有り」と紹介されている、それらは順番に並んでいなくてはならない。

4．奴（な）国　の都心分析　―　衛星都市論　―

松浦川の河口にあった末盧のクニから女王国の間の行程を、**図－2**　に示している。郡使はこの区間を陸行している。里数には「余」の字がなく、歩測による確度の高さを感じさせる。

伊都・奴・不弥の3つの宮殿はごく近い。奴 の都「山門」の至近に20分の1の規模で2つのクニが存在していることは、それらが衛星都市であったと考えられる。当時、衛星都市の概念があったとはいえないが、不弥の宮は、伊都の郡使宿舎から2百里、後述するように、日帰り圏内にあった。

魏志倭人伝で紹介される代表的な10国の大きさは、つぎの**表－2**に、組織は**表―3**に、いずれも筆者がまとめている。とくにこの中で注目されるのは、2万余戸の大国、奴国に王がいなくて、官「しまこ」のみが記録されていることである。1世紀、漢の都に使節を送った、あの奴国にこの時王はいない。これと同時に、伊都に「世々王がいる」記事に注目せねばならない。しかも「王」は伊都以外には、誰も記されていない。これは**第3点**の鍵ともいえ、「伊都の王とは倭王であり、男の王である」と理解される。

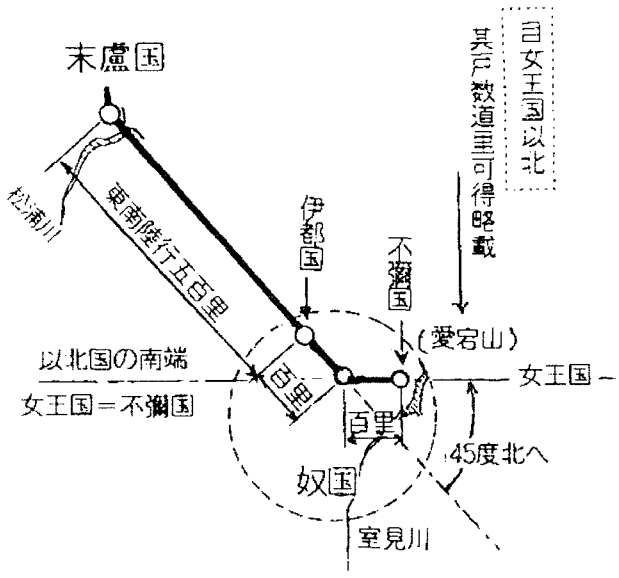
表－1　魏志倭人伝、「従郡至倭」行程の記述

No.	国　名	その国へ進む方向	陸行／水行	里　数	至／到	所要日数	備　考
	1－A	1－B	1－C	1－D	1－E	1－F	1－G
①	狗邪韓	乍南乍東	帯方郡より⇒	七千余里	到る	―	倭の北岸
②	対　馬	―	始めて一海を渡る	千余里	至る	―	女王の北の端
③	一　大	南	又、一海を渡る	千余里	至る	―	「はるの辻」に中心
④	末　盧	―	又、一海を渡る	千余里	至る	―	松浦川河口
⑤	伊　都	東南	陸　行	五百里	到って常駐	―	「倭都」である
⑥	奴	東南	「行く」記載なし	百里	至る	―	（最寄駅―下山門）
⑦	不　弥	東	行　く	百里	至る		伊都から日帰り圏
⑧	投　馬	南	帯方郡より⇒	―	至る	水行二十日	（韓の南に接す）
⑨	邪馬台	南	帯方郡より⇒	万二千余里	至る	陸行一月と水行が十日	女王の都する所は不弥の国
⑩	狗　奴	―	其の南にあり	奴に接す	敵対国	―	不属女王

では、もうひとつの衛星都市、不弥のレゾンデートルはなにか。

ここは、女王卑弥呼が不弥宮にいたと、筆者は考えるのである。

図－2　においては、JR筑肥線の下山駅門駅近くに「奴」の宮殿と「不弥」の宮が比定されている。不弥の宮は、室見川河口の丘



図－2　末盧から不弥まで、奴の都心　（作成：小合彬生）

にあったと筆者は考えている。なお、比定例の多い粕屋郡宇美町は、前原市から5百里はある。3世紀とはいえ、5百里と2百里を間違えることはまずない。

5．その他21国の配置　―　邪馬台の版図　―

（1）国の広さ

邪馬台国は、記述通り7万余戸の大国である。江戸時代に話を移せば、当時、1反の田地は、1石の米を産し、その値段はほぼ1両であったと聞く。昭和30年頃までの農家には、おくどさん（竈）に大きな釜や鍋が乗っていた。釜は「五升炊き」くらいだったと思うが、とても大きかった記憶がある。この「一つ釜のめしを食う人たち」を、仮に1戸と数えるとしよう。一寸乱暴であるが、胃袋から江戸時代の領地を推算できるかもしれない。

朝夕2回、米のめしを炊いたならば、1日1斗、月に3石、年に36石くらいの消費量になる。1戸は年20～30石を食べるのである。2万余戸の「奴の国」では40から60万石の米を消費する計算になる。これは偶然か、黒田藩の52万石とほぼ似た量になる。

さて、同じようにして邪馬台国の大きさを計算してみる。奴国の3倍半、7万余戸の国土ともなると、江戸時代の領地に換算した場合には、2百万石近くとなる。農地の生産性が低い場合には、さらに広くなるはずである。

表－2　魏志倭人伝「各国」の戸数/家数の記述、（不弥と伊都は山門の衛星都市）

No.	国名	郡からの累計里数	戸数の表記 有可	戸/家	戸/家数	現在の地名（参考までに）	備考
	2-A	2-B	2-C		2-D	2-E	2-F
①	狗邪韓	七千余里	ー	ー	不明	韓国の南端部	倭の北岸
②	対馬	八千余里	有	余戸	千	対馬	
③	一大	九千余里	有	許家	三千	壱岐	島は方「三百里」
④	末盧	一万余里	有	余戸	四千	唐津市	（松浦川の河口）
⑤	伊都	万五百余里	有	余戸	千	前原市か 福岡市西区	郡使が常に止まる 倭王がいる
⑥	奴	万六百余里	有	余戸	二万	福岡市西区	福岡藩位の大きさ
⑦	不弥	万七百余里	有	余家	千	西区愛宕	女王の宮がある
⑧	投馬	なし	「可」	余戸	五万	韓国の南部	大国だが不属女王？
⑨	邪馬台	万二千余里	「可」	余戸	七万	長崎県、福岡県 大分県、佐賀県	女王以北の6ヶ国と その他21国の合計
⑩	狗奴	なし		ー	ー	熊本県など	不属女王

黒田藩について、鍋島藩36万石、小倉の小笠原藩40万石、豊前中津藩の40万石などなどを加えると、九州の北部でほぼ2百万石の領地になる計算である。

邪馬台国の候補地を考えるには、江戸時代において、約2百万石の大名領なみの「広さ」を想定しなくてはならないのである。

（2）　距離を考える

倭人伝に用いられた「里」は、特殊なものとされる。当論では、詳しい議論は避けるが、つぎの例からも、その推測は可能である。

朝鮮半島南部の三韓諸国は、三国志・東夷伝の中で[7]、3世紀当時の国土面積が記されている。馬韓、辰韓、弁韓の3国で14～15万戸になり、国土は東西が日本海と黄海、南北には京城市と釜山市の間で、方4千余里を占めていた。（図－4、参照）。山間を含め、千里四方の土地に1万戸弱の居住密度になる。この4千余里は、地図上、約280 kmであるから、70 km四方の土地に1万戸弱と、平均の戸数密度も計算できる。

この数字を利用すれば、邪馬台国は約3～4万平方kmと算定され、「その他21ケ国」のサイズをも推定できる。その他21のクニは、平均すると2千戸ゆえ、その領土は、やはり同じ居住密度を持つと仮定すれば、約4百里四方になる。現在ならば、約20　km四方である。だいたい壱岐の島のサイズが、いい目安となる。

距離に関する重要な記述は、帯方郡から女王の都まで、「万2千余里」である。しかしながら、筆者の計算では「不弥まで万7百余里」となり、残りがほんとの「余里」となる。

つぎに大切な距離に関する記述は、倭国の大きさを記して締めくくる記事「周旋五千余里」である。女王の所から船で巡って5千里ほどで、邪馬台国の東端に達する。いままで説明したように「女王国」の東は博多湾であり、国の東端ではない。博多湾の卑弥呼の宮から、船で関門海峡を巡り、国の東南端、つまり12番のクニがある別府湾まで周旋すると、4百里の12倍で「五千余里」となる。

ここで倭人伝の読み方で、いままでと句読点が違う点をひとつ紹介しておく。「女王の説明」から、「国の東端」に説明が移る部分、「周旋」の個所である。原文は「持兵守衛女王国東渡海・・」である。女王について「兵が武器をとり女王を守衛する」と読み、続いて「国の東、海を渡る千余里・・」と読むのである。「兵士が警護する」の目的語が「女王」となり、「倭国の東」の方は、国東半島・別府湾からとなり、1千余里で周防灘の対岸に達する。なぜなら、女王国は「不弥のクニ」であり、周防灘に面していない。この新しい読み方（文献1、49頁）で、矛盾点がひとつ取り除かれる（注、3）。

（3）　邪馬台国の版図

版図の作成には、「その他21のクニ」を順に並べる必要がある。

こうして推察した邪馬台国の版図を、図－3　に提案する。版図は、長崎県、福岡県、大分県、佐賀県にまたがり、東に周防灘があり、南に熊本県もある。

倭人伝には、火の山・阿蘇や関門海峡、瀬戸内海の記述もなく、第14番のクニ、為吾（イゴかイガ、飯塚市）ですら、郡使は訪れてないようである。遠旁といわれるクニも、意外や、女王国の近くにあったのである。

①　シマノクニは糸島郡あたり、②ミヤジのクニは宮地岳・津屋崎付近、水巻町の③イヤのクニ、洞海湾の④クキのクニ、行橋・箕島の⑤ミナのクニ、中津市の⑥ココツ、宇佐市の⑦フコ（謎の深池に関係あり）・・・と順に比定して行くことができる。

その他、別府市には⑪コユのクニ、丹の

表－3　魏志倭人伝「倭人国行政機構」の記述

No.	国名	国の規模	邪馬台国の行政機構 女王	王	大官	官・副		備考
	3-A	3-B	3-C	3-D	3-E	3-F		3-G
①	狗邪韓	不明				ー	不明	「倭種」でなく「倭」
②	対馬	千余戸			卑狗	曰く	ー・卑奴母離	
③	一大	三千許家				曰く	卑狗・卑奴母離	
④	末盧	四千余戸				-		官の記載なし
⑤	伊都	千余戸		倭王	一大率	曰く	爾支・泄謨觚・柄渠觚	伊都「王」は不弥を管理下に置く
⑥	奴	二万余戸				曰く	し馬觚・卑奴母離	山門に宮殿を営む
⑦	不弥	千余家	卑弥呼			曰く	多模・卑奴母離	「女王国」である
⑧	投馬	五万余戸		*		曰く	弥弥・弥弥那利	* 王はいない？
⑨	邪馬台	七万余戸				有り	伊支馬　弥馬升 弥馬獲支など四人	女王府は不弥にあり（四人は女官？）
⑩	狗奴	不明		ひみくこ		有り	狗古智卑狗	女王に属さず

産地は産物にちなむのか⑫カナスナのクニ、奴の最強のライバルは地理からして⑭のイゴ（飯塚市）である。⑬のキのクニは、⑫と⑭の間にあればいいが、ここでは仮に大分県の方に図示した。⑯ヤマのクニ、⑰クジュウのクニ、⑱ハリのクニそして⑲キイのクニの4つは以前から並んでいると思われていたが、全体の配置の中で正しく位置づけられた。西の端は佐賀・吉野ヶ里の⑳ウナのクニである。

女王国以北のクニを左上の輪に、その他21のクニは記載順に番号を打った。クニが時計回りに並べられていたことがよく分かる。

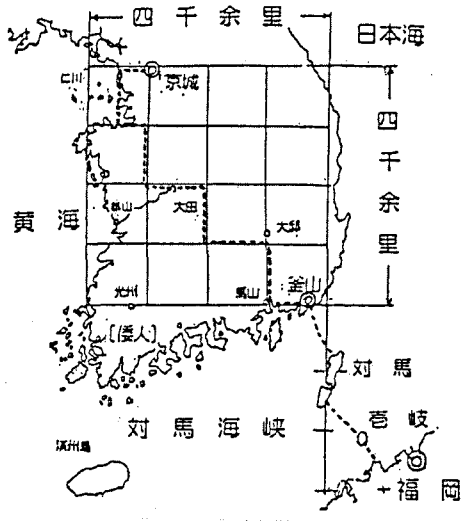
この図の理解を助けるため、現在の地名を少し書き込んでいる。右肩に「玄界灘、関門海峡、周防灘」、右下に「別府湾」、左下に「有明海、阿蘇山」を記した。

6．水行十日、陸行一月の旅

（1） 現在の旅

郡使たちの旅の目的地が伊都であると決まったからには、行程・日程の追算は容易である。3世紀、帯方郡からの旅が非常に大変だったとの思い込みもあるようだが、図－4 に示す現在の地図で、この旅の地理的感覚を、まず養っていただきたい。

京城から釜山は408.5㎞、KTX韓国高速鉄道は、2時間40分で到達する。対馬海峡は、釜山～博多間が220㎞、最新の水中翼船、



図―4　朝鮮半島と対馬海峡　（作成：小合彬生）

ビートル号はわずか2時間55分でつないでいる。意外と時間のかかるのが、唐津～下山門両駅間の41㎞で、電車で61分である。トータルして、約700から750ｋｍの旅だったのである。

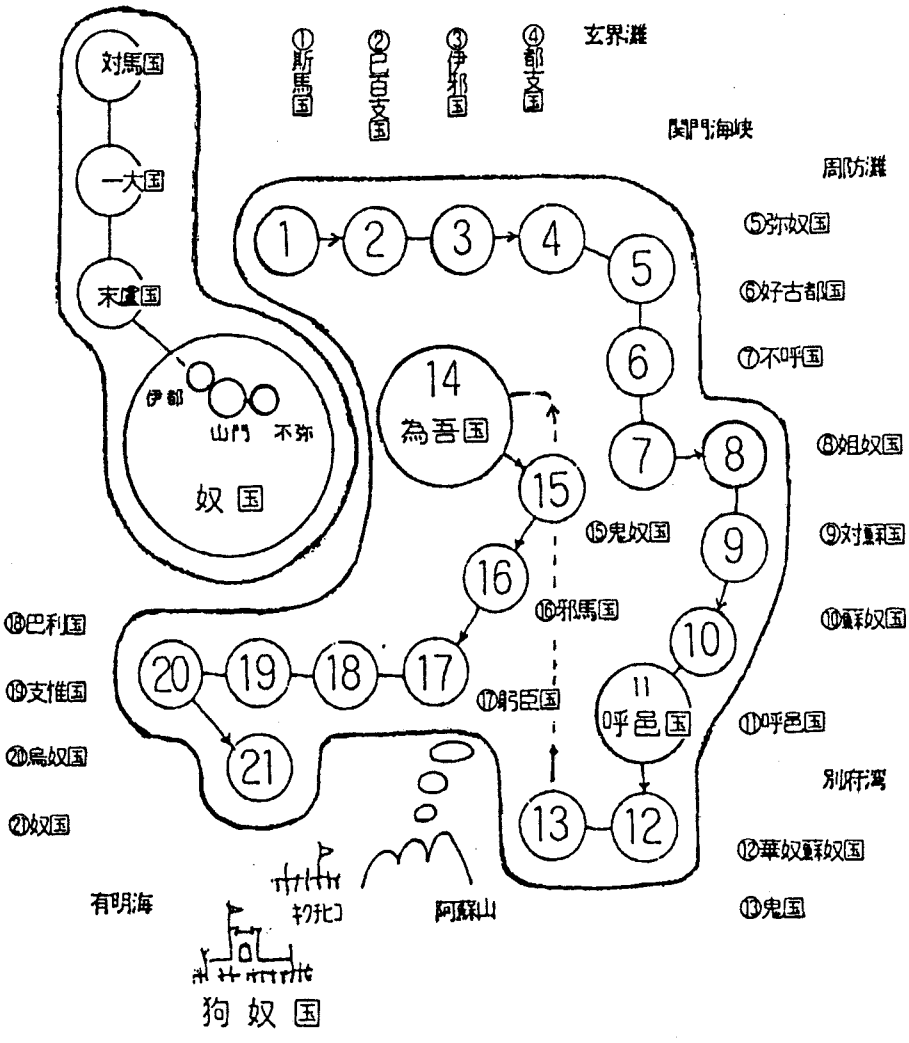
（2） 三世紀の旅

a）帯方郡から狗邪韓国

帯方郡から狗邪韓の国まで7千余里である。まず水行で出発するが、この付近は平均潮位差8ｍ、潮流も激しい。なるべく早く陸行に切り替えているはずである。「韓国を歴て」をその根拠とする。彼らは内陸の韓諸国を、図-4上に点線で推定するように、訪れているのである。なお、筆者の調べでは、もしこの区間を半島西岸・南岸巡りで舟航した場合、釜山市までに「倍近い」万2千余里はかかるのである。

b）対馬海峡を渡る

陸から釜山市付近に達した一行は、「さあ始めて海を渡るぞ」と覚悟を述べている。最初の渡海は約30海里。海流もある。海上で夜を迎えては命がない。できれば船上では炊事やお弁当休みもとらないのがよい。早朝出発、大勢が櫂で一気に漕いで、対岸に達すべきである。40～50人くらいの漕ぎ手のドラゴンボートは最高10ノット出せる。図-5 タイプの船[8]で、昼飯までに渡海を終えるのが、もっとも安全である。



図―3　三世紀耶馬台国の版図　（作成：小合彬生）

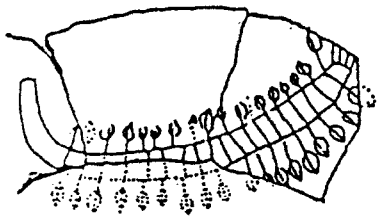
c) 対島の縦断

中国人達はとくに海に弱かったらしく、対馬では島を縦断したと推察される。鳥や獣の道に似た小道をたどったと倭人伝は記している。島の中は、報告通り４百余里ほどを歩いたと思われる。

d) 原（はる）の辻は内陸港

壱岐の島では、最大の集落遺跡と「みなと」が内陸部の「原の辻」で見つかっている。郡使の一行は勝本で船を降り、方３百里の国を縦断、原の辻に泊り、印通寺から再乗船と推理する。

漕ぎ手３２人・奈良県出土



図―５　弥生時代の外洋船[8]　（土器残片、左の船首がそりあがる）

e) 呼子から唐津市へ

呼子は天然の良港である。一行はここで上陸したのか、前の人の姿が見えないほどの茂みを通って、末盧までを難渋行進している。

狗邪韓、対馬、一大、末盧の間はいずれも渡海千余里であるが、実際は長短あい混ざっている。近代測量術のない時代のこと、これらはまったくおおよその値と思う。

f) 末盧と伊都の間

東南へ陸行する５百里は、郡使達が歩いた実距離であると考える。一行は朝出発時に日の出の方向よりやや南向きに進路をとっていたらしい。筑肥線の唐津・筑前前原駅間は約30㎞、また周船寺駅まで行くと35㎞ほどになるが、１日で歩ける距離である。伊都の国に到達したあと、郡使の宿舎がどこにあったか、まだはっきりしていない。

g) 伊都から不弥は日帰り圏

伊都から奴国は、東南の方向とあるが、ここだけ「行く」という動詞がない。伊都が衛星都市だった証拠でもあろうか。その奴国から東へ百里のところに不弥がある。

末盧・伊都間の距離の５分の１といえば６～７㎞である。まず、伊都・不弥の位置を求める。前原市に伊都があったとして、そこから５分の１行程を進めても、今宿駅にしか至らない。郡使は前原市より、もう少し東に宿舎を構えていたらしいと推理する。

JR 下山門駅の南に奴国の宮殿があったとすると、卑弥呼の宮は福岡市西区愛宕の丘あたりに比定される。当時、ここも「山門」の一部であった。つまり、「邪馬台」だったのであろう。

結論として云えるのは、伊都・奴（山門）・不弥の、３つの宮殿は、いずれも「日帰り圏」内にあったのである。

（３）郡から不弥まで、万７百余里

帯方郡から邪馬台国は万２千余里と、道案内部分は縮めくくられている。不弥の国までの里数をたすと、あと千３百余里不足する。

この不足分の処置で、議論百出となってきたのである。繰り返すようであるが、筆者はこれを「余里」すなわち誤差であると考える。

強いて云えば、対馬・壱岐２島縦断の里数をこれに加えれば、つじつまが合うが、３世紀・中国人の見方は憶測の域に止まる。

（４）水行陸行のまとめ

３回の渡海に予備日も含めて６日。帯方郡からの舟行が、予備日を入れて４日。合計して「水行は十日」の勘定になる。

水行の合計が10日。それならば、陸行の合計についても、ここで慎重な検討を加えねばならない。「渡海・水行」を除いた「陸行」行程の合計を求めれば、郡より邪馬台まで　約500ｋｍである。

この距離は、東海道五十三次のそれと不思議なことに同じである。江戸末期には、江戸～上方間は、14～15日で往来できたが、３世紀の旅ではその倍の日数がかかっている。街道事情が悪いのか、陸行に一月を要しているが、これは決して無理な数字ではない。

７．耶馬台国の外交交渉史

わが国から中国へ、はじめて使節が赴いたのは、西暦57年、奴の国王から後漢帝のもとへと記録されている。この時「印綬」を賜ったことも、またよく知られている（文献１、p-57、７行）。

つぎに西暦107年、倭の「帥升」が洛陽を訪れている。邪馬台国の歴史記事によると、卑弥呼擁立の前の70～80年間、男王の時代があったらしい。すると、この使者は、邪馬台国成立の報告に、遠路参上したものと考えることもできる（文献１、p-57、15行）。

さて魏の時代となり、公孫氏が滅びそうになると、早速邪馬台国の卑弥呼から、帯方郡の太守を通じて魏の皇帝に使者「難升米」が送られた。三国志の英雄、諸葛孔明が五丈原で没してから、わずか４年後のことである。大陸の情勢にいち早く対応している

表―４　三世紀、邪馬台国の時代年表　（作成：小合彬生）

西暦	中国　年	交　渉	記　　事
238	景初 2年	邪馬台国 初の朝貢	卑弥呼が帯方郡を通じ、 6月、魏都に使者を送る 12月、卑弥呼親魏倭王に詔せられる。印綬・詔書は郡に假授される。
240	正始 1年	帯方郡⇒ 伝達の使① ⇒答謝①	郡太守弓遵、梯儁を倭人国に派遣、詔書・印綬を倭王（　と書かれている　）へ直接、拝假した 倭王は使いによって、魏の都に受領を答謝上奏した
243	正始 4年	邪馬台倭王 第二の朝貢	倭王（　と書かれている　）が魏に貢献する
	年不明	8年まで	―正始 8年までに、卑弥呼は亡くなっている― ―載斯烏越等、帯方郡に対狗奴国戦拡大を報告―
245	正始 6年	魏・賜黄幢	難升米に黄幢を賜う、郡に假授、郡から届ける
247	正始 8年	帯方郡⇒ 伝達の使②	郡太守「王」が着任。張政を倭人国に派遣し、魏からの詔書・黄幢を難升米に直接拝假し、檄を告諭。
		⇒答謝②	20人の倭使節、新女王トヨの謝礼と贈物を洛陽へ

魏では女王卑弥呼に「親魏倭王」の詔書・印綬を授ける。一般の下賜品は難升米に封をして授けられたが、皇帝からの「詔書・印綬」は直接倭の女王に届けねばならない。それらは郡の太守にまず「假授」され、郡からの特使が倭国に向かったと筆者は理解している。

郡使は倭国に到着したのち、これらを女王に「拝假」しようとしたがなぜか女王ではなく「倭王」に授けている。受領のお礼も「倭王」が郡使に託して奏上した。女王は人前に出なくなっていたらしい。

そののち突然、難升米に黄幢が与えられることになった。これは軍旗のようなもので、倭人軍の総帥が持つものに違いない。女王につぐ地位にいなくては全軍の指揮は難しい。

倭人伝の記事によると、当時、南にある狗奴国との戦いが熾烈になったさまが郡まで報告され、これに応じた授与と見られるが、国を代表する女王ではなく、ナンバーツーだが武人の難升米が受け取ることになった。卑弥呼に授けない理由があったはずである。

黄幢は皇帝からの下賜品である。やはり、郡の太守に一旦「假授」されたのち、郡の使節により直接、難升米に拝假されている。郡の使者「張政」の主目的はこの黄幢の「拝假」であり、ついで、檄（ゲキ＝看板状のもの）をもたらしたと筆者は考える。

この時、卑弥呼の死去による「とよ」の女王就任があり、張政の帰国とともに新女王の答礼ミッションが派遣されている。

郡からの使節団が邪馬台国を訪れたのは、**表-4** のように2回だけだったと筆者は考えている。伊都に留まった中国人は、山門（やまと）にあった奴の都や、不弥の女王宮に日帰りで往復した。

彼らは阿蘇山にも、飯塚市の「為吾」にも足を運んでいない。伊都国にいて、倭人から情報を収集したと思われる。

諸説の中には、中国人たちは女王のいる大和へ行かず、伊都でいい加減な報告を作成したという、いわゆる「伝聞説」がある。使者は伊都に駐まった点は評価するが、中国人使節の忠誠心を疑い、倭人伝の内容を大いに疑う説ではある。

これに対し、筆者の説は「日帰り圏説」とも云える。日帰りで伊都・奴・不弥の宮を往来しながら、使節は使命を全うしたのである。

8．伊都の王が女王国を統属する

邪馬台国で唯一の「王」は、伊都にいて、代々皆女王国の面倒をみていたと 筆者は解釈する。原典では、伊都に「世有王、皆統属女王国」と書かれている。これはできるだけそのまま受け取るのがよい（注—4）。

この伊都には、「郡使」が常に駐まっているほか、「一大率」もいる。官も他の国に比べ多い。爾支はここの市長らしい。また、ひなもりと呼ばれる武官はいない。一方、隣の超大国、奴の国には王がいなくて、官・しまこ（実力者）がいる。

伊都にいた王は、先行する諸研究では、軽視あるいは無視されている。これは、「統属する」という動詞の解釈に起因すると考える。

これまで、多くの論は「女王が伊都の王を統属する」と解釈してきた。奈良県にいた女王が、伊都の王を統属していると考える、いわゆる、大和説にとって非常に都合が良かったからである。

推理作家の松本清張は、ここの主語は伊都王、目的語は女王国であると正しく解釈[9]したが、「魏の官である伊都王」が、属国「女王国」を統属したと述べ、世の共感を失った。

筆者は、邪馬台国の王である伊都王が、女王国こと不弥国を管理し、さらに倭王として行政・外交を担当していたと解釈する。女王国が「不弥のクニ」であれば、この解が正しいと納得されよう。

倭人伝によると、2世紀の末頃、大乱を収拾するため、卑弥呼が女王として立てられた。卑弥呼が退位した記事はない。非常に長生きしており、人前に出ることも稀になっていた。この記述から、その在位は郡使が伊都へ来た3世紀のなかばまで続いていたと考えられる。しかし、女王連合国の行政実務は、「倭王」が担当した。女王に代わって「詔書と印綬」を拝仮し、答謝も述べたと推察する。

倭王は外交、軍事面の総括をする。魏から黄幢を賜った難升米も、帰国後数年、「倭王」に昇格していたらしい。

この伊都の王は、卑弥呼の在位中に幾人か交代したと思われる。松本清張なら、帯方郡から代々王が派遣されていたと考えるところだが、当時の郡治は安定したものでない。3世紀に伊都国に到った使節は、記述とおり2回に過ぎないと考えている。

女王連合国は2世紀の末成立したが、そのとき軍事・外交に当たる「男の倭王」と、祭祀を司る「女王」の機能分離が図られた。連合国の王都は外交に都合の良い伊都に置き、女王宮は近くの不弥に置く。このようなわけで、衛星都市のかたちが、倭の都として選ばれたのであろう。（注—5）

倭王は、連合各国から選ばれると推察したが、国内の強力な国を少しあげれば、飯塚市の為吾、北九州市の郡支、別府市の呼邑、大分坂ノ市市の華奴蘇奴、吉野ヶ里・佐賀市の烏奴などがある。しかし、連合最大の国は、やはり奴国である。

難升米は、発音の近さから、奴の国と関係の深い男であり、もし、卑弥呼の男弟として出自が良かったとすると、帰国後「倭王」に昇格することもありうる。彼は、伊都に都し、張政が来たころ、連合国を統治していてもおかしくない。

9．女王の役割と女王府、卑弥呼の墓

「耶馬台国」という記述は、原典ではただ1回しか見当たらない。「女王の都するところ」までの日数が示されている個所である。女王の都がどこか、そこには書かれてない。しかし、筆者は女王の都は「不弥」であると推理した　。

耶馬台国には、官が4人記されている。この4人は不弥にある「女王府」に属する女官でないかと考える。一方、不弥のクニに記されている官は多模、副は卑奴母離であるが、この2人は現代でいえば、官は市長、副は女王の近衛隊の長にあたると推察する。

1千余家という規模の小さいクニであるが、奴婢だけでも1千人と書かれている。衛兵もそのくらいはいるに違いない。クニの形態としては、神殿中心の宗教都市の色が濃い。

この際、「戸と家の差」に言及しておきたい。不弥国と一大国が、クニの大きさを「家」で記述されている。（**表-2　2-C-③**と⑦）

この2つの国の共通点は、兵士、水夫、奴婢、役人などの比率が高く、兵舎、寮のような賄い、あるいは給食形式で「めし」が用意されていたと考えられる。このタイプのクニには「戸主」が少ない。これが、数え方を変えた理由ではないだろうか。

さて、小さな丘の上にある不弥の諸費用は、女王連合が負担していたはずである。警護、女官などの人事は伊都にいる倭王の管轄で、諸費用も伊都を通じて支出されたのではないだろうか。

女王ひみこの仕事で、記録されているのは、太夫難升米を帯方郡に派遣しただけである。美人女王に会えると「張り切って」倭を訪れた使者は女王ひみこに会えなかったらしい。

女王「とよ」の仕事として記録されているのは、使者「張政」たちと答謝の倭人使節団を送り出したことだけである。

女王は、人前にほとんど出ないほどの老齢、つづいて13歳の少女であっても勤まる。祭祀をもっぱらとしたようであり、外交では

ごく一部を担当していた。どうも「斎王か巫女」だったらしい。そして国の実権は、男性の倭王にあったと、筆者は推察している。

伊都の「倭王」がどのくらいの権力を持っていたか。伊都の王の墓から、王権を示す「璧」が少なからず出土することから理解できる。領土は、前原市域くらいはあって食料の供給は可能であったと思われるが、連合国としての国事・軍事費用は女王連合諸国で集めたはずである。魏都・洛陽へ使節を派遣する費用は連合国の支出だったはずであり、かなりの富を調達できたと想像される。

ひみこが亡くなったとき、葬儀・墓について郡使の報告が詳しく伝えているが、筆者は伊都の王により、その葬儀が営まれたと考えている。ひみこのいた丘は狭くかつ聖域であるため、女王の墓は、今の前原市内に営まれたと確信する。候補地としては、以前、原田大六氏の講演を聞いたが、「平原遺跡の埋葬者は老齢の女性で、頭を西に40枚ほどの中国古銅鏡に囲まれていた」という。さすが、有名な青銅鏡コレクターの墓と思うのだが、確度は高そうである。

先日、現地の歴史公園を訪れた。埋葬点の中心から四方を見ると西に斜面がある。歩測すると約50歩から先は崖で下に落ちる。もし、ここに塚を築くなら、半径は50歩になるはずと観られる。

思うに、先行する研究の多くは、不弥国のレゾンデートルが不明確であった。そして研究者は、不弥のクニから南に向け、港もないのに船で出発しようと、原典と格闘していた。

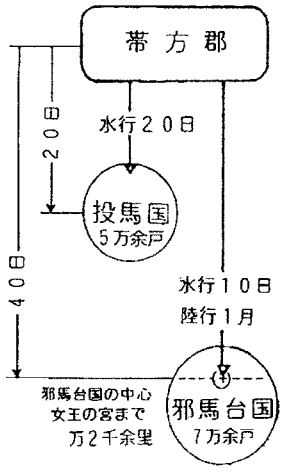
しかし、不弥の宮にひみこがいるならば、さらにここから旅立つ必要はない。不弥のレゾンデートルも明確になる。

１０．投馬国についての考察

投馬国の記事は、邪馬台国とともに**表－１**に示すとおり日数で記されている。また、これらの表は各欄を３つの数字で表せるので、ここで説明しておこう。これからの討論に便利である。

投馬国と邪馬台国への所要日数は、**表－１**の **1-F-⑧**、**1-F-⑨**にある。また、郡から投馬国までの距離は、**1-D-⑧** で里数はない。

筆者は、これを「帯方郡から南へ水行二十日のところに投馬国があり、同じく南へ四十日のところに女王の都がある」と解釈するが、文の解釈上矛盾はない。 **図－６**に、この関係を示したが、投馬国の位置について、新しい論議を生むことになろう。



図－６　投馬国と耶馬台国への日数　（作成：小合彬生）

「投馬国に関する記述の不足」が、多くの疑問を生んできた。５万余戸の大国で、奴国の２倍以上、耶馬台国の半分以上の戸数を持つ国に「王」がいない。官の弥弥と副の弥弥那利のみが記されている。**（表－３の 3-D-⑧）** はたして、５万戸の大国は、伊都にいる倭王の統治下にあるのかどうか、大切なところが不明である。

筆者は、東夷伝・韓伝の冒頭で「韓、南は倭と境を接し・・」（文献７、p-302）、また、弁韓国の記事「その西、涜盧国は倭に界を接す」（文献７、p-305）、さらに「狗邪韓国は倭の北岸」の記事 **（表 1-G-①）** から、投馬国は朝鮮半島南部にあった国ではないかと推理する。そこなら、「帯方郡から南へ水行二十日」のみで到達できる。そして、帯方郡から狗邪韓国への経路の説明においても、「韓国を歴て」と「投馬国まわり」の２つのコースがあったのだが、郡使はこの時、内陸を通る方を選んだのだと理解される。

さて、「倭の北岸、狗邪韓の国」には戸数、官ともに記載されていない。「女王国以北」の６国にも含まれていない。しかし、「到」の字をわざわざ用いている **（表 1-E-①）** ことからして、このクニは、「投馬国の一部」だった可能性がある。ともかく、投馬国の記述は十分ではない。すこし私見をおぎなったが、その位置、行政に考察を加え論を進めてみた。

１１．結　論

三世紀、朝鮮半島中部にあった「帯方郡」の太守により派遣された「郡使」一行は倭人の国に向かった。

朝鮮半島西岸で２回、対馬海峡で３回、計５回の渡海に５日、それぞれ予備日を入れて、合計10日を「水行」に費やした。

さらに、行程中約500 kmの「陸行」に、１月をかけた。合計約40日、万５百余里の旅で、目的地「伊都国」に到着した。郡使はそこに常駐し「奴と不弥」には、その後、日帰りで往復した。

耶馬台国は、対馬から不弥までの６ケ国と、その他21ケ国からなり、戸数は７万余戸。現在の長崎県、福岡県、大分県および佐賀県に亘る国土を有していた。首都は「伊都のクニ」で、ここに倭王がいた。女王府は「不弥」にあった。こう筆者は推察する。

不弥の宮は、福岡市西区の海に近い丘の上にある。付近の地名は山門（やまと）であり、JR筑肥線の下山門駅を最寄り駅とする。

女王は人前に出ないほどの老齢、つづいて13歳の少女であって、祭祀、外交のごく一部を担当していた「斎王か巫女」だったらしい。国の実権は、男性の倭王にあったと、これも筆者は推察する。

倭王は軍事、外交、貿易、裁判など社会生活を司り、伊都に連合政府を置いていた。郡使も一大率もそこにいた。倭王は女王卑弥呼の治世の間に「何人か」が交代したと解釈される。連合を構成する各国からの代表がつぎつぎに就任したのではないだろうか。

そして、第２回目の郡使が「黄幢」を「難升米」に拝假（与える）したのは、洛陽派遣後数年にして、彼が倭王に昇格していたからと、筆者は推理した。

国の東に周防灘があって、山口県、愛媛県に対している。国の南には熊本県がある。熊本の北端には菊地郡があり、福岡県山門郡にあった「第２の奴国」に対抗していた。国の西は佐賀県で、「烏奴国」があった、これは吉野ケ里遺跡を含むと考える。

また、博多湾から関門海峡を通って別府湾まで周航すると、当時の里程で「五千余里」となり、当説の正さを裏付ける。

この研究の結果、**図－３** に示したように、「三世紀耶馬台の国」

の姿が、土木工学的考察を経て、論理的かつ具体的に提起された。

国は、江戸時代大名領換算で、ほぼ2百万石分の大きさを持つと試算したが、**図-3**はこれを満足する。

この過程でよく分かったが、倭人伝の記述は、「倭人語固有名詞を漢字で書き取るとき」以外は、非常に正確だったのである。伊都に郡使たちが到着し、滞在する。そこには代々「王」がいる。この記述をそのまま信ずることが、倭人伝の謎を解く上で必要不可欠だったのである。筆者は「伊都は倭都」だったと考える。

2003年、神戸市での発表会において、吉本彰山口大学名誉教授による、邪馬台国論[10]に活発な議論が交わされた。これに刺激を受け、学会の場で、ぜひ、ご議論願うべく当論を用意した。

皆様の、貴重なご議論を頂けると、さいわいである。　(完)

参考文献

1）石原道博編訳：『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・随書倭国伝、中国正史日本伝（1）』岩波書店、1988年。

2）小合彬生：土木工学で邪馬台国に挑む、pp43-48、土木学会誌「ひろば欄」、土木学会、平成元年10月。

3）小合彬生：ひみこのいた不弥の宮への三世紀の旅、『港湾経済研究』№39、pp112-121、日本港湾経済学会、2001年。

4）小合彬生：三世紀奴（な）国の行政組織・みなと・海運、『港湾経済研究』№41、pp146-156、日本港湾経済学会、2003年。

5）小合彬生：伊都の王が女王国を統属する、『兵庫歴研』第19号、pp26-31、兵庫歴史研究会、平成15年。

6）小合彬生：三世紀ひみこの宮への陸行水行、『兵庫歴研』第20号、pp30-38、兵庫歴史研究会、平成16年。

7）今鷹・小南・井波共訳：『三国志（Ⅱ）』世界古典文学全集・第24巻B、pp-302～305、筑摩書房、1993年1月。

8）茂在寅男：『船と古代日本』、p-95、PHP研究所（21世紀図書館シリーズ）、1987年7月。

9）松本清張：『邪馬台国、清張通史（1）』講談社文庫、p-195、8行目、2000年版、「郡は女王国以北を直属地としておさえた・・」

10）吉本彰：邪馬台国はどこにあったか、『土木史研究講演集』Vol.23, pp9-16、土木学会土木史研究会、2003年。

注―1．先行する研究の総括―1．

―邪馬台国の比定地、大きさ、行程の分析などの一覧―

まず、佐伯有清著『研究史、戦後の邪馬台国』昭和50年9月、吉川弘文館に見られるように、研究史が複数存在する。それほど研究は多い。ここでは、もっとも新しい形態であるネット上の「邪馬台国大研究」井上筑前ホームページを紹介してみよう。

http://inoues.net/yamataikoku/waj.html の「邪馬台国比定地一覧」がよくまとまっている。この表には、九州論者76人（うち福岡県38人）、大和説論者（舎人親王、伴信之、内藤虎次郎ら）39人、その他地域（徳島からジャワ、エジプトまで）17人が、筆者名、比定地、卑弥呼は誰か、ともども記されている。著者が当初示した2論点から、大和説、その他地域説をまず棄却する。

九州説の中でも、邪馬台国が7万戸分の国土面積を有していたと分析している研究は少ない。ともかく、卑弥呼の都が「福岡県内」にある諸説を示す。筑紫山門説は、新井白石、津田左右吉、榎一雄など10人、筑後川流域説は、甘木市を含めれば安本美典らも加わり16人になる。福岡平野に候補地を挙げる人は、井上光貞、和辻哲郎、大林太郎、森浩一、松本清張、古田武彦、奥野正男ら12人があげられている。しかし、「伊都・不弥」首都説は、これまでない。

注―2．先行する研究の総括―2．

―土木工学から見て、国土面積、首都の位置、交通、その他21国の番号順配置などが合理的に行われているか。―

当論文の基本は物理量からの検証である。これまでの研究者は、卑弥呼の都を求めるのに急で、国の面積に思い至っていない例が多い。現在の「市町村規模」の邪馬台国はありえない。このスクリーニングで100以上と言われる候補地は、わずか2～3ケ所に絞られる。

具体的に邪馬台国の大きさを、3-4万平方kmと計算した例を筆者は知らないし、江戸時代の大名領に換算して、2百万石と推理した例も寡聞にして聞かない。

末盧のクニから2千余里で女王の都に至ることは知られていたが、そのうちの5百里に、実測歩行記録が含まれていることに気づき、検討している例は少ない。

ここが鍵になったのであるが、「衛星都市、日帰り圏」という考え方に気づいた研究者は、いまだないといえる。

「水行十日陸行一月」という旅行日数の解釈では、最近、わが解釈に近いものが見られるようになった。しかし、陸行距離延長が東海道53次と同じであると指摘した例は聞かない。

その他21ケ国を順番に並べる研究は数例あるが、順番のとり方に錯綜が多く、また、現在の地名とうまく関連付けている例は少ない。

注―3．後漢書（文献1、pp 55-59）と倭人伝（同、pp39-54）の記述の違いについて

後漢書当該部分は、記述に「狗奴国が、東・瀬戸内海にある、など」矛盾があり、筆者は、より古い倭人伝の方が正しいと思う。

また、文献1）、倭人伝49頁、権威あるこの本でも、原文を「常有人持兵守衛。女王国東渡海・・」と読んでいる。筆者は本文で述べたように「女王と国東の間」で切ることを提案している。

注―4．伊都国王の統属する国は

文献1）、倭人伝40頁、本文3行目。この本は、伊都国に「世々王あるも、皆女王国に統属す」が正しい解釈と記述している。これが現在、ほとんどの研究にそのまま取り入れられている。松本清張（文献―9）は、これと異なる見解を示し、注目された。

注―5．室見川河口の宮とは

古田武彦：風土記にいた卑弥呼、p-177、朝日文庫、1995年5月、室見川河口で発見された、いわゆる「室見川の銘版」が紹介されている。これは、107年洛陽に使者を送った倭人連合国が、17年後の125年に、この地に邪馬台連合国の宮殿を完成させたことを示唆するようである。この時点では、女王卑弥呼は擁立されていないが、愛宕山にはすでに、「やまと連合の神社」がもう存在したのかもしれない。　ともかく、興味ある研究課題を生むと思っている。

連絡先自宅

〒658-0051 神戸市東灘区住吉本町3-4-14

電話/fax 078-841-8072

2004,04,08